

白木のままの木材が、京町
家に明るさとぬくもりを演
出する(京都市上京区)



木材は白木のまま ぬくもりも演出

こだわり宅見

京町家を明るく

(上京区)

玄関を開けると、真新しい木の香りが優しく包む。そして、明るい。

京都市上京区の秋江義弘さん(72)宅。二階建てで、幅五・五尺、奥行き十五尺。築百年ほどの京町家だ。「薄暗いという思いで、約一年かけて改めて狭く、冬には底冷えで寒修した。

床板のサクラや柱のヒノキ



秋江さん宅の外観

など木材は、明るさを演出するため白木のまま使用した。手触りも柔らかな。従来の黒い柱も一部残り、白と黒のバランスが、明るさを強調しすぎない落ち着いた空間をつくり出す。

「上り下りするだけで楽しい」という階段は、二階に上ると、そのまま直線的に廊下につながって奥に行けるように改造した。「家が広くなった感じで、住みやすさが増した」と秋江さんは満足げだ。

「時がたてば、より深みと味わいのある家になる」。新しいさと古さの共存に期待を込める。

(大西保彦)